

# 障害児の表現活動(ムーブメント)に関する研究(第2報)

— ムーブメントドラマ導入による療育方法の試み —

研究第8部 星 美智子・高城 義太郎  
 共同研究者 近藤 洋子(日本児童手当協会)  
 山田 隆(東京学芸大学  
 教育心理学研究室)  
 太宰 久夫(玉川大学児童学研究室)

## I 研究目的

障害児の身体・運動機能の向上、情操の陶冶等の面において、身体・感情表現活動は極めて有効である。アメリカ、イギリスにおいては、すでに障害児の治療教育に“ムーブメント”をとりいれて効果があげられている。障害児の治療教育、健常児との交流教育において、造形・音楽以外の新しいタイプの表現活動を開発し、教育的治療性を高めることに寄与することが本研究の目的である。

昨年度は、障害児の表現活動、ムーブメント指導に関する内外の文献の体系的な把握とデイ・ケア形態における障害児へのムーブメント導入を実験的に試行した。今年度は健常児と障害児の統合保育の場において、ドラマを主とする表現活動を試行し、その結果の考察から、デイ・ケア型児童福祉施設におけるドラマを主とする表現活動の導入要件を設定することとした。

## II 方法

### 1. 対象

相模原市にある潤野辺保育園の年長児クラス「Mぐみ」

表1 被験児

被験児	性別	生年月日	年齢	WISC-R			テスト場面の行動
				VIQ	PIQ	I. Q.	
N. I.	M	51. 1. 20	5 : 9	58	43	43	構音不明瞭, ヨダレ, 意欲あり, レポート良好
K. T.	M	50. 11. 19	6 : 0	不	能		指示により椅子に座れる, テスターにすり寄る, 発語「ハイ」のみ
O. Y.	F	50. 10. 9	6 : 1	不	能		テスト用具をいじる, 指示に応じない, 他に興味に移る「パスガキタ」etc.
Y. M.	M	50. 11. 13	6 : 0	52	97	67	始め拒否的, テスト完了できる, 動作性テストに興味を示す
T. D.	M	50. 10. 4	6 : 1	45	50	38	興味に限られる, 指示にのりにくい, 教示の理解不十分

み」(健常児26名, 障害児3名), 「Sぐみ」(健常児26名, 障害児2名), の障害児5名を対象とした。表1は被験児の年齢, 性別, I. Q. および行動特徴を示したものである。

### 2. 手続き

#### (1) プログラムの内容と所要時間

まず pre test によって、ムーブメント・ドラマのプログラムの内容のくみ方を検討し決定する。すなわち、1クラスの平均施行時間を40~45分とし、はじめの15分間は①リズムムーブメント(リズムにあわせて身体を自由に動かせるようにする), つぎに②リラックス(床にねかせて身体力を脱かせる(10分間)), ③ドラマ(さまざまな「ごっこあそび」, たとえば一方がねんどになり他方がねんどで好きな形をつくる2人ペアのあそび, 「しょっぱいかお」や「強い手」の表現など)を15分間の構成とする。

#### (2) 観察・記録の方法

ムーブメント・ドラマに参加する障害児の行動を観察するため、①参加度, ②行動, ③感情の三つに分け、それぞれについて評価基準をつくり、予め記録用紙(附1参照)を用意し逐時チェックあるいは記述していくこととした。観察者は障害児1名につき1名(1クラス2~3名)。健常児を含めた全体の動きはVTRで記録する。

(3) ムーブメント・ドラマの実施

保育園内のホール(184m<sup>2</sup>)でムーブメント・ドラマの指導者2名によって実施し、担任保育士は子どもとともに参加したり、傍から見守っていることとした。週1回午後1時30分から行ない、1クラス(28~29名)終了後、他の1クラスに実施した。

(4) 日時

pre testを含め、1981年10月30日から1982年3月3日まで、本実験は9回施行した。

III 結 果

1. プログラム内容別の検討

個々の被験児について、参加度、行動、感情それぞれが、プログラム内容(ムーブメント、リラククス、ドラマ)によってどのような傾向がみられるかを検討した。プログラム内容別に評定段階を%で示したのが表2~4である。ここにみるように参加度、行動、感情別、また、プログラム内容別にみても著しい個人差がみられる。

N. I. は参加度をみるとドラマ70.8%、ムーブメント40%、リラククス26%とドラマがとくに目立っている。この70%台の自発的参加は他の子とかけはなれた成績である。行動面の評定はリラククス、ドラマ、ムーブメン

トの順であるが、47%から35%の間にあり、参加度ほど



図1 ムーブメント



図2 リラククス

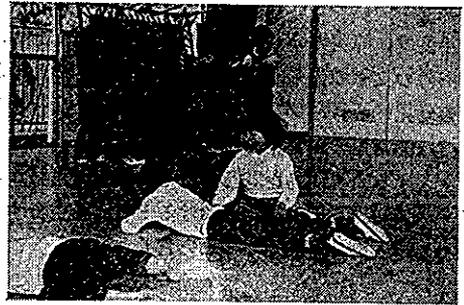


図3 ドラマ

2人が組になり、\*ねんど、にみたてた相手の子を形づくる場面

表3 行動の評定結果(%)

対象児	内容 段階	ムーブメント			リラククス			ド ラ マ		
		a	b	c	a	b	c	a	b	c
N. I.		35.5	45.2	19.4	47.4	47.4	5.3	41.1	58.8	0
K. T.		19.4	47.2	33.3	10.5	26.3	63.2	0	24.0	40.0
O. Y.		2.4	19.5	78.0	0	21.7	78.3	0	3.7	96.3
Y. M.		11.8	58.8	29.4	6.3	62.5	31.3	5.0	30.0	65.0
T. D.		53.1	37.5	9.4	47.1	23.5	29.4	38.9	13.9	47.2

- a. 指示を理解してよく動く
- b. 似たような動き
- c. 指示とは異なる動き

表2 参加度の評定結果(%)

対象児	内容 段階	ムーブメント					リラククス					ド ラ マ				
		a	b	c	d	e	a	b	c	d	e	a	b	c	d	e
N. I.		40.6	25.0	18.8	3.1	12.5	26.3	36.8	26.3	5.3	5.3	70.8	12.5	16.7	0	0
K. T.		8.6	0	62.9	0	28.6	0	0	47.4	5.3	47.4	0	0	20.0	20.0	60.0
O. Y.		9.8	2.4	14.6	31.7	41.5	4.2	0	33.3	12.5	50.0	0	0	7.1	21.4	71.4
Y. M.		8.8	35.8	32.4	0	23.5	6.3	37.5	37.5	0	18.8	36.0	0	12.0	4.0	48.0
T. D.		48.5	21.2	21.2	0	9.1	41.1	23.5	11.8	5.9	17.6	38.9	13.9	8.3	8.3	30.6

- a. 自発的に参加
- b. 先生や友だちを模倣して参加
- c. 先生や友だちの働きかけによる参加
- d. 参加しないが見ている
- e. 参加しないで他の行動

星他：障害児の表現活動（ムーブメント）に関する研究

表4 感情の評定結果（%）

対象児	内容 段階	ムーブメント			リラックス			ド ラ マ		
		a	b	c	a	b	c	a	b	c
N. I.		53.1	46.9	0	26.3	47.4	26.3	23.5	76.5	0
K. T.		59.4	32.4	8.1	21.1	73.7	5.3	20.0	48.0	32.0
O. Y.		21.4	66.7	11.9	4.8	76.2	19.0	11.1	63.0	25.9
Y. M.		47.1	47.1	5.9	18.8	75.0	6.3	41.1	52.9	5.9
T. D.		67.7	32.3	0	58.8	35.3	5.9	61.1	36.1	2.8

a. 楽しそう b. どちらともいえない  
c. つまらなさそう

の差はみられない。感情ではムーブメントが53%で他の二つは20%台である。

K. T. は自発的参加は殆んどなく、さそわれて参加しているが、行動はそれらしい動きをみせ、感情ではムーブメント60%、リラックスとドラマはそれぞれ20%楽しさをあらわしている。

O. Y. の評定をみると、他のことに気が散り殆んど参加していないことがわかる。それでもリラックスは働きかけに応じており、行動も似た動きが20%みられ、ムーブメントでは楽しそうが20%になっている。

つぎに Y. M. であるが、ドラマは36%自発的参加で他の2つが6~8%とドラマに参加意欲を示しているが目立つ。ムーブメント、リラックスは友だちのまねをして参加（40%弱）しており、行動もそれらしい動きとよく動くの評価をあわせると70%、ドラマはこれに比べ35%低い。好んで参加しても必ずしも上手に動けるとは限らないことを示している。楽しさはムーブメント47%、ドラマ41%でリラックスは20%にみえない。

T. D. は他の子に比べ、プログラム内容によって差が少なく、自発的参加は40%~50%弱、行動は40%から50%強、楽しさは60%弱から70%弱とそれぞれ10%以内の偏差である。楽しんで参加していることでは他の4人をひきはなしている。

つぎに、対象児全体についてみると（表5）、参加度では自発的参加がドラマ29%、ムーブメント22.3%、リラックス14.7%の順になっている。しかし、ドラマは全く参加しないものももっとも多く、ムーブメントとリラックスは友だちや先生の模倣をしたり働きかけによって参加が70%内外になっている。行動については、指示を理解して動けるものの割合は、ムーブメント23.0%、リラックス21.3%、ドラマ17.6%の順であるが大きな差はみられない。楽しんでいるのは、ムーブメントの48.3%が一番で、つぎがドラマ33.6%、リラックス25.0%となっている。

2 施行回数による変化

各個人の評定を第1回から第9回までの変化を明らかにする形で整理をした。図4はその一例である。被験児ごとにプログラム内容別にみたので、1名につき3図、計15図になる。紙面の都合上、参加度、行動、感情ともにプログラム内容によって差がなく、評価点も高かった障害児 T. D. の結果を例としてとりあげてみたのが図4~6である。障害児は当日の気分によって左右され、瞬時の刺激に動揺をみせ、指導回数による効果を行動変容からとらえにくいことは、昨年度の研究でも明らかにされた。T. D. をとりあげたのは、もっとも安定し、良い成績をもつものを提示するためである。T. D. の評定結果を図

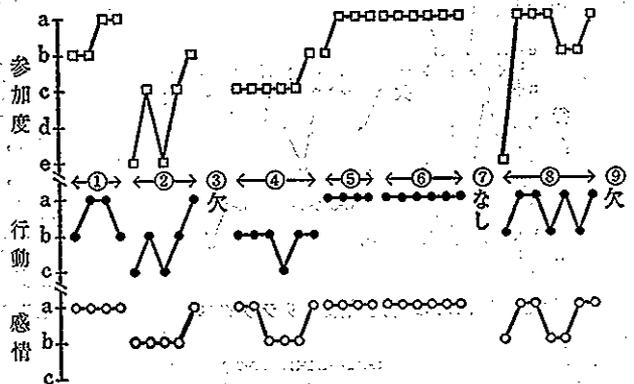


図4 T. D. の評定結果（ムーブメント）

表5 対象児全体の評定結果（%）

内容	評価 段階	参加度					行動			感情		
		a	b	c	d	e	a	b	c	a	b	c
ムーブメント		22.3	16.0	29.7	8.0	24.0	23.0	40.8	36.2	48.3	46.0	5.7
リラックス		14.7	17.9	31.6	6.3	29.5	21.3	35.1	43.6	25.0	62.0	13.0
ド ラ マ		29.0	5.8	12.3	10.9	42.0	17.6	22.4	60.0	33.6	52.5	13.9
Total		22.8	13.0	24.3	8.6	31.4	20.9	33.6	45.5	38.2	51.8	10.0

でみてわかるように、実験を重ねるごとの上昇はつかめない。他の障害児は、さらにこれを下回って日による変動がみられる。各個人の図表によって明らかになったことは、指導者や友だちに働きかけられて参加し、行動点だけでなく感情点が高くなることである。つまり、参加度がeからcに達する時、行動点がcからb点に、感情点がcからa点に移行する。これは、T.D.以外の障害児で、とくに自発的行動の少ない子に顕著であった。

健全児とことなり障害児はセッションを重ねるごとの順調な評価点の上昇はみられない。しかし、初回と最終9回近くでは確かに障害児の動きや感情表現に差があることは、観察されるのである。したがって、1回ごとの差の検討ではなく、前3回と終りの3回とを比較してみることにした。初めの3回と後の3回の合計点を各評価段階ごとに集計し、全員の計を%でグラフに表示した(図7~9)ところ、その効果が明確によみとられた。すなわち、プログラム内容三種いずれも、また、その参加度、行動、感情のそれぞれについても、評価の高いa点の%が初め3回より後の3回に多くなり、最下位段階は逆に減じている。図のPreとPostの棒グラフの連結

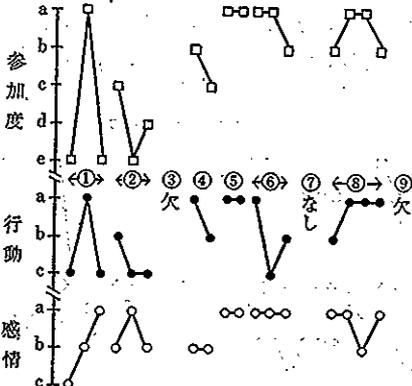


図5 T.D.の評定結果(リラクセス)

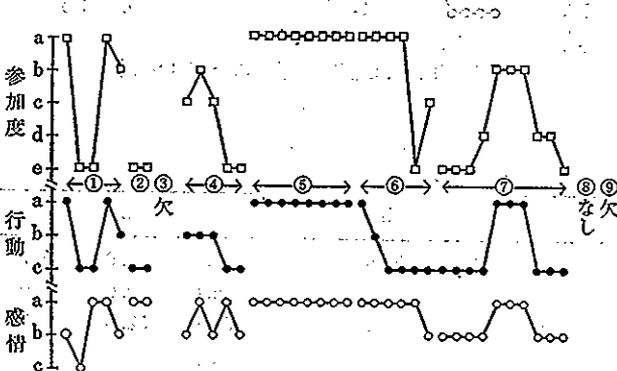


図6 T.D.の評定結果(ドラマ)

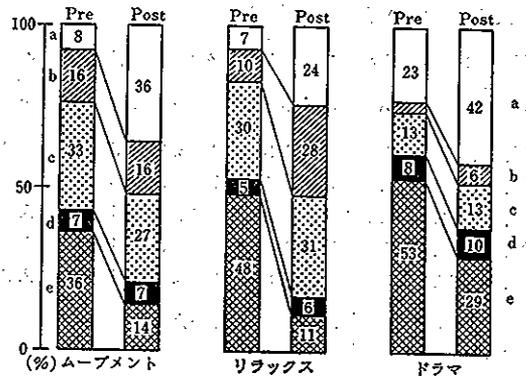


図7 参加度の変化

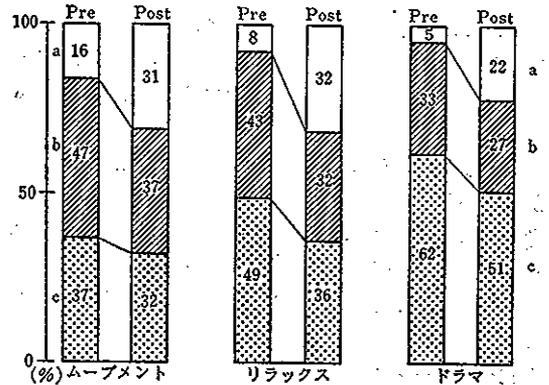


図8 行動の変化

線の右下りがこれを示している。

つぎに、以上の差を検討するため、eを0点とし、d=1, c=2, b=3, a=4点とおきかえて合計点を出し、これをチェック回数で除した数を各被験児のPre点数あるいはPost点数とした。これによって差の検定をしたのが表8に示すものである。ムーブメントへの参加度は有意の差が認められた。リラクセスにもその傾向はみられるが、ドラマは他の二つの内容に比べてより高度であり、また参加度が行動や感情に比べてより直接的であることを考慮すれば、セッション回数を増やすことによって、その効果は期待できるといえる。

3 保育者による評価  
日常、保育を担当しているクラス担任に、今回のドラマ活動の実施に関する感想や意見をもとめた。これを整理すると、つぎのようになる。

3 保育者による評価

日常、保育を担当しているクラス担任に、今回のドラマ活動の実施に関する感想や意見をもとめた。これを整理すると、つぎのようになる。

①活動への参加状況とその効果

障害児5名のうち、Y.O.を除いて皆がはじめての経験に不安と緊張をあらわし、指導者に

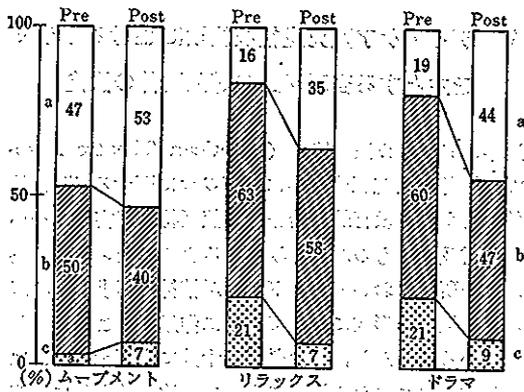


図9 感情の変化

表6 プログラム別の Pre:Post 差

	ムーブメント		リラックス		ドラマ	
	Pre	Post	Pre	Post	Pre	Post
参加度	$\bar{x} = 1.56$	$< 2.53$	1.23	$< 2.53$	1.30	1.92
	$S = 0.73$	0.91	0.76	1.03	1.51	1.20
	$r = 0.72$		$r = 0.89$		$r = 0.57$	
	$t = 3.03$		$t = 2.58$		$t = 0.48$	
	$p < .05$		$.10 > P > .05$		NS	
行動	$\bar{x} = 0.77$	0.98	0.62	0.98	0.43	0.70
	$S = 0.49$	0.54	0.35	0.66	0.44	0.52
	$r = 0.47$		$r = 0.88$		$r = 0.86$	
	$t = 0.40$		$t = 0.88$		$t = 1.04$	
	NS		NS		NS	
感情	$\bar{x} = 1.44$	1.47	0.96	1.30	1.00	1.20
	$S = 0.27$	0.25	0.29	0.36	0.31	0.43
	$r = 0.22$		$r = 0.18$		$r = 0.58$	
	$t = 0.09$		$t = 0.81$		$t = 0.56$	
	NS		NS		NS	

N = 5 df = 4

警戒心をもち、(Y.O.は無関心で窓の外をみたりしている) 保育にすがりついて離れない。2~3回目には、保育の助言や手助けにより短時間参加し、活動内容によっては逆に保育を促して一緒に参加しようとした。4~5回と進むにつれ、警戒心をとき、自発的に参加しようとする機会がふえ、参加しない場合も保育にすがりつかず、ひとりでその場にいることができ、時どき参加していく姿勢はとても楽しそうで大へんよい経験であると感じた。これは健常児の楽しい活動、雰囲気刺激された点が多いと思う。後半には、ドラマ活動のある日を待ち、当日はその時間を待ち遠しがらるまでになった。ドラマの活動の時間では、みんなで十分に自己解放できる楽

しみからクラス全体のムードの高まりがみられた。もっとも感動したのは、ドラマ指導者と子どもがマンツウマンで行う活動のときであり、日常保育において今だかつて見たことのない、すばらしい子どもの喜びの表情を身体全体から感じとれた。とくにこの活動においての障害児の活発な態度には目を見張った。

② 日常活動への影響

実験時期が年間保育の後半期であったことから、クラスでの劇活動を行う時期と並行する形となった。ドラマ活動を体験しているため、例年とちがって劇作りに対するクラスのまとまりが大へんよく、全員がそれぞれ活発であり単調でない思いがけない発展がみられた。障害児も孤立することなくさまざまな形で楽しく参加してきたのにおどろく。例年はボスの存在の子が中心になったが、今年はクラス全体で盛り上がっていき、今までにない感動的な劇の発表となった。これはドラマ活動の大きな影響、効果と考える。

③ 導入時間について

ドラマ活動を始める前に、造形遊び絵画等、室内で静かにひとりひとりで行う活動をし、ドラマ活動に入ると、とくに強い発散、解放となり、そのため集中力が散漫になった。反面、ドラマ活動の前にかかる自由遊びで、ある程度解放してから導入されたばあいには、ドラマ活動に大変集中力をみせ、かつ活動内容にあった解放が十分にできていた。

なお、園長より、今回のドラマ活動の体験が子どもたちに大変貴重なものであり、有効であるので、今後も継続してほしいとの強い要望があった。

IV 考察および総括

今回、われわれは健常児と障害児の交流教育の場で、ドラマ活動を実験的に導入し、障害児を中心にその行動を観察した。その結果を考察し総括するとつぎのようになる。

1. 毎回、ムーブメント(ビートのきいたテンポの早い曲にあわせて身体を動かす指導)、つぎにリラックス(全身の緊張をとく)、ドラマ(ごっこ遊び—何かになったつもりの身体表現)の順にくみあわせた指導をおこなった。ムーブメントは日常保育で用いられない音楽であるが、指導者のもとに子どもたちは生き生きと動き、この種の音楽の日常保育への導入を考えさせられた。リラックスでは、ゆっくりと緊張をとくこと、とくに指導者が1対1で指導していく場面で障害児をはじめ子どもたちの満足感がみられた。ドラマでは、実際の行動は指示

のようにいかないが、障害児が楽しんで自発的に参加もするようになった。それぞれの活動内容のねらい、効果が、障害幼児にも適用され効果があらわれることが観察された。

2. 今回のプログラム内容の導入による効果を回を追うごとくの変化で検討すると、健常児とことなり障害児においては、各内容ムーブメント、リラクセス、ドラマ別にみても、参加度、行動、感情それぞれの評価をみても、順次に上昇していくことは認められなかった。その日のコンディションや、その時の刺激にきづられやすい障害児の特徴をあらわしているといえる。しかしながら、初めの3回と後の3回とを比較すると、著しい進歩が各パートにみられた。とくに、はじめは指導者や健常児にきづられて参加し、それらしい行動をとりながら、感情面で楽しい表情がみられ、この楽しい経験が終り近くになって自発的参加度を多くしていることが明らかであった。

3. 参加度、行動、感情の面から評定した成績をみると、I. Q. と相関なく、また、テスト場面の行動ともことなっていた。よく参加し、よく動き、楽しんでいるT. D. はI. Q. 38であり、テスト時には指示にのりにくく興味範囲のせまい子である。また、つぎに評価点の高かったN. I. は構音障害、ヨダレがある。意欲はありレポートも良好であったが、I. Q. は43である。5人の障害児のうち、もっともI. Q. の高いY. M. (I. Q. 67) は評価点はさきの2人より劣っている。テスト場面の緊張、テストにあらわされる能力は日頃の生活の消極性や集中力のなさを表わし、日常の保育担当者の評価と近い。しかし、今回のドラマ活動での子どもの行動は保育者に「今だみたことのない喜びの表情」あるいは「積極性」に感動をうけたといっている。ドラマを主とした表現活動の導入が障害児教育に大きな役割をはたすことができる。また、障害児は健常児の嬉々とした雰囲気につられて参加し、健常児にさそわれて参加しており、交流教育の重要性を把握することができた。

4. ドラマ活動の効果は、プログラムの活動内容が向上していくだけではない。日常の他の活動にも大きく反映し、積極的、自発的活動がみられるようになり、形や結果にとらわれずにそれなりにさまざまな活動に参加するようになっていく。これは実験の対象となった施設の保育者たちの評価であり、実験後もこの活動の導入を要望されているのである。

## V デイ・ケア型児童福祉施設におけるドラマを主とする表現活動の導入要件の設定

近年、アメリカ演劇協会 (American Theatre Association) 等の研究報告の中に、ドラマに関する芸術的価値とともに、教育的、治療的価値 (特に障害児について) に言及するものが多くみられるようになったが、われわれの研究においても、ドラマが精神薄弱児の表現力、社会性等の形成において有効に作用することが確認されている。しかし、その効果を十分に発揮するためには、日常のプログラム活動にとって、次の諸要件に留意し、計画的にそれが展開される必要がある。以下、精神薄弱児通園施設及び保育所における障害児保育を中心として導入要件について提案する。

1. われわれが重視するドラマ (drama) は、人にみせることを目的とするものではなく、自己創造のための言語、身体的表現活動、一人の参加者としての経験であり、その点、演劇 (theatre) と区別して考えている。著名なドラマ指導者ウェイ (Way. B) は、ドラマが人生における生き方の練習であるというが、障害児の感覚、想像、共感、感情移入、信頼感、言語表現、身体表現等に有効に機能するドラマに関する指導者の基本的理解が先決である。ともすれば、ドラマという和学校劇という既成概念に拘束され、鶴せるための演劇的慣習を適用し易いが、指導者は、教育、治療としてのドラマの意義について、先ず明確な認識をする必要がある。

2. ドラマ指導者は、行事のために、あるいは短期間の集中的な実施として行われるのではなく、上述の教育、治療性を発揮するためには、日々のプログラム活動の中に定着させることが重要である。それも、ドラマという特設の時間を設定して行なうのではなく、精神薄弱児通園施設においては、お話、音楽、リズム、遊び等の活動の中に組みこみ、各活動の一部をドラマ活動化の方がよいと思われる。また、障害児保育においては、お話、音楽、リズム、遊び等の活動の中に組みこみ、各活動の一部をドラマ活動化の方がよいと思われる。また、障害児保育においては、保育内容6領域を統合化した遊びの形態で、ディレイ・プログラム活動の一部として、継続的に行われることが望ましく、健常児との交流による動機づけ、モデリング、心理的支持等の作用性を十分に考慮すると効果的である。また、ドラマ活動の場としては、指導室、集会室、保育所においては、保育室、遊戯室が充当されると思われるが、机、椅子等が自由に移動でき、何でも起りうる空間があることが望まれる。

ドラマ・ブロックの設定や、プレイヤー、テープレコーダー、簡単な照明器材があればドラマを一層豊かにすることができる（伝統的な舞台、ステージを特設することに拘泥する必要はない）。

3. 実際指導において重要なことは、前年のムーブメント指導時においても述べたように、障害児については、個々の児童の発達特徴、行動傾性、能力や興味の個人差に対応したきめ細かい指導が基本的に重要である。特にドラマにおいては、遊びの中の身近かなこと、そして児童の関心のたかいことから動機づけを行なうことが大切である。ドラマ活動のプロセスの中では、五感を使うこと、イメージをもつこと、身体を動かし、マスターし、制御すること、スピーチまたは話す練習をすること、フィーリングの自然表現をすること、感情のコントロールをすること、リラックスすること、集中すること、人物づくり（characterisation）をすること等の体験が得られる。従って精神薄弱児は、それらの体験をとおして、彼等のパーソナリティ上の問題とされる周囲の事象に対する探索心、積極的活動力、注意力の強化に資するわけである。さらに重要な点は、ドラマ活動による快い満足のいく体験をとおして、彼等の自尊感情を育

て、環境の影響によって二次的に形成され易い自信そう失、劣等感の克服に向けての有効な作用化をはかることである。このようにドラマのもつ教育的、治療的効果を十分に発揮するためには、指導者自身のドラマに関する体系的指導方法、技術についての研修機会を用意する必要がある。

最近、わが国においても、障害児の人格創造に資する絵画療法、音楽療法等の芸術療法の研究が進展しつつあるが、今後は、アメリカ、イギリス等で先導的に実施され効果をあげているムーブメント、ドラマを障害児の保育、生活指導、精神療法の中に積極的に導入して行きたいものである。

本研究の実施にあたっては、研究主旨に賛同された社会福祉法人刈野辺保育園の全面的協力をいただきました。また、ムーブメントの実際の指導には玉川大学院文学研究科教育学専攻の川崎似付史氏の熱意ある協力をうることができました。ここに厚く感謝の意を表します。

なお、本研究は昭和57年度厚生省心身障害研究費補助による研究であることを付記します。

第 回

附表1 クリエイティブ・ドラマティックス観察用紙

ob.

対象児名 男・女 観察日時 月 日 時 分～ 時 分(所要時間 分)

組 観察者名 天気 気温

プログラム内容	時間	観 察 項 目									記 録 (セッションの方法も記録する 参加しない時のことも記録する)		
		① 参 加 度					② 行 動			③ 感 情			
		A	B	C	D	E	A	B	C	A		B	C
		自発的に参加する	模倣して参加する 先生や友達を	先生や友達から動き掛けに参加する	より参加する 参加しているが	見ているが参加しない 他の	のことに参加しない 指示をよく理解し	似たような動き	指示とは異なる動き	楽しそう	どちらともいえない	つまらなそう	
リズムムーブメント	3'												
	6'												
	9'												
	12'												
	15'												
リラクセス	18'												
	21'												
	24'												
	27'												
ドラマ	30'												
	33'												
	36'												
	39'												
	42'												
	45'												